

神学宗教学から読み解くエルサレム問題 中東情勢の深層

国際基督教大学学務副学長
森本あんり

就任から一年。繰り返されるトランプ米大統領の問題発言。世界を揺るがせている「エルサレム問題」の背景にあるものは？



イスラエルのアメリカ大使館をエルサレムに移転するというトランプ大統領の方針が、世界の平和と均衡を揺るがせている。昨年末の決定以来、中東諸国だけでなく日本を含むアメリカの同盟国からも批判と不同意が表明されている。国連総会では、決定の撤回を求める決議案が圧倒的多数で採択された。

こうした現代政治の動向や分析については、新聞で十分に報道されて

いるので、ここで繰り返す必要はないだろう。本誌読者の方々には、慌ただししい国際関係の舞台から一步退いて、神学や宗教学の視点から問題の古層を訪ねてみることをおすすめしたい。

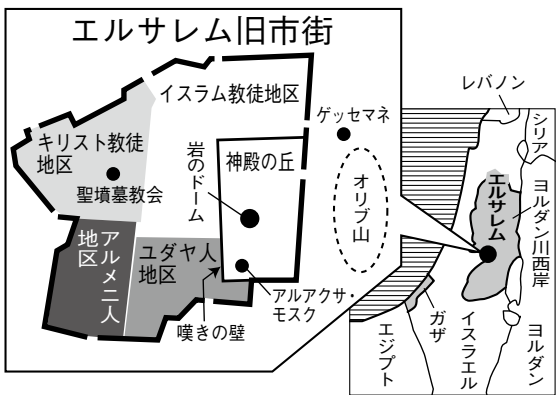
アメリカとイスラエル

一連の報道に接してまず頭に浮かぶのは、トランプ氏に限らず、アメリカはなぜいつもイスラエルに味方するのか、という問いである。

アメリカの人口に占めるユダヤ人の割合は、ほんの二%に過ぎない。いかに大統領上級顧問で娘婿のクシュナー氏が正統派のユダヤ教徒であっても、いかに「米国イスラエル公共委員会」(AIPAC)などのいわゆる「イスラエル・ロビー」が強力であっても、それだけでこの疑問を解くことは難しい。実はこれは、ユダヤ教徒ではなくキリスト教徒の問題なのである。特

に、人口の三割を占めるとも言われる宗教右派は、政治家から一般市民に至るまで、徹底してイスラエル擁護の立場を取る。

イスラエルは、彼らの理解の中ではアメリカと同じ運命のもとに生ま



れ、共通の価値観で結ばれた特別な国である。両国は、宗教的迫害を逃れて外からやってきた移民によって建国され、正しい審きを下す神への正しい信仰をもち、法の支配と市場経済という民主的原理を基盤とする国である。ただし、イスラエルはアメリカと異なり、今も敵に周囲を囲まれている。だから無条件に助けなければならぬ、というのが彼らの基本感情である。

長い間の差別やホロコーストの歴史からすると、ユダヤ人はたしかに犠牲者だったので、戦後しばらくのあいだ、イスラエルを批判することは政治的なタブーに近かった。しかし、強大な軍事力をもつ今日のイスラエル国家と、これに抵抗する未組織のパレスチナ民衆とが対峙しているのを見ると、いったいどちらが少

年ダビデでどちらが巨人ゴリアテなのか、ちよつとわからなくなってしまう。

こうした自己理解の共鳴に加えて、福音派のアメリカ人には、ある特徴的な聖書理解がある。それは、聖書の中のイスラエルと現代のイスラエルを直結させる字義通りの解釈である。ユダヤ人のイスラエル帰還を願う運動は「シオニズム」と呼ばれるが、実は「シオニスト」はキリスト教徒の中にも多く存在する。彼らにとって、一九四八年のイスラエル建国は、旧約聖書「創世記」で神がアブラハムに言われた「わたしはこの地をあなたの子孫に与える」(15:18)という約束の成就なのである。

エルサレムの再建は、「ダニエル書」(9:25)ではキリストの再臨に先立つ重要な里程碑の一つに数えら

れている。新約聖書でも、「ローマ書」や「黙示録」には、終末到来の前に神が離散したユダヤ人たちの再び集めてイスラエルを回復させる、と読める文言がある。福音派のキリスト教徒は、これらの言葉をそのまま信じて現代にあてはめ、神の国の到来を実現させようとしてイスラエルを支持するのである。

なぜエルサレムなのか

では、なぜそれほどエルサレムが大事なのか。今度は宗教学の観点からこの問いを考えておこう。

問題の核心は、テルアビブかエルサレムかという選択ではない。そもそもユダヤ教・キリスト教・イスラム教という三つの宗教がみなエルサレムを聖地としている、ということころにある。どうしてそんなに重なっ

てしまったのだろうか。お互いが平和裡に共存したいのなら、はじめから別の場所を聖地に選べばよかっただろう。

だが、これは宗教学的に不可能である。これらの宗教にとって、聖地はどうしてもエルサレムでなければならなかった。「首都」なら、政治家の「一存で「ここ」と決めることができるかもしれない。だが、地上のどんな権力も、「聖地」を勝手に決めることはできない。聖地は、おのずからして聖地になるのである。

宗教学者のミルチア・エリアーデは、このような特別な場所を「世界軸」(axis mundi)と呼んだ。それは、全世界の存在論的な中心であり、天と地が繋がる「へそ」であり、宇宙の創造ないし開闢の原点であり、この世の価値や秩序の体系に生じた裂

け目である。

城壁に囲まれたエルサレムの旧市街は、歴史を通して常に「聖地」であった。ユダヤ教徒にとって、それはアブラハムが息子イサクを神に奉獻しようとしたモリヤの山であり、ダビデ王が契約の箱を置き、ソロモン王が神殿を建てた場所である。キリスト教徒にとっては、キリストが十字架にかけられたゴルゴタの丘があり、その上に「聖墳墓教会」が建てられた場所である。イスラム教徒にとっては、ムハンマドが夢の中で天馬に乗って訪れ、そこから光の梯子を昇ってアツラーにまみえた場所である。

だが、そもそもダビデは、なぜエブス人からこの地を購入して祭壇を築いたのか。それは、彼以前にそこがすでに聖地だったからである。考

古学的に見ると、エルサレムは紀元前のはるか昔から、ヤハウエ宗教以前の祭儀が幾層にもわたって行われていた場所であることがわかる。つ

まり、どの宗教であるかにかかわらずなく、エルサレムは聖地なのである。聖地は聖地にしか作られない。だから聖地は重なってしまうのである。

大使館移転と首都認定

就任して一年、世界はトランプ大統領の言動に振り回されてきたが、大使館の移転計画そのものはクリントン政権下の一九九五年に議会で承認されている。この決定は、半年ごとに実施が先送りされてきており、トランプ大統領にとつても今回が二度目の判断であった。選挙戦で掲げた派手な公約を何とか実現したい大統領にとつて、ここで二の足を踏む姿勢を見せるわけにはゆかない、というのが実情だろう。

とはいえ、さしもの彼も一朝一夕にそれができると考えてはいない。中

東情勢の不安定化がもたらす危機要因も、もちろん計算済みだろう。移転先の選定や移転の実務には、それとなくパレスチナ側への配慮をにじませるはずである。大使館の移転という物理的な作業は、エルサレムを首都と認定するという理念的な宣言と表裏一体だが、今後の焦点はその両面の絡み合いをどのように上手く処理するかである。

「イスラエル」という名を神に与えられたヤコブは、「あなたを祝福する者ははのろわれ、あなたを祝福する者は祝福される」(創世記27:29)と約束されている。トランプ氏がいちばん気にかけているのは、正しい行いをすることではなく、何をしてでも神に祝福される側に居続けることである。選挙期間中から今日まで、彼ほど露骨にそれを実践している人はいない。



城壁に囲まれたエルサレム旧市街。ユダヤ人地区の嘆きの壁越しに、ムスリム地区の岩のドームが輝く。